

---

---

## 『ラ・リュミエール』に見る 1859 年フランス写真協会の写真展

槇野佳奈子（東京大学・レンヌ第 2 大学）

---

---

1839 年にフランスで写真が公式発表されてから 20 年後の 1859 年、フランス写真協会（SFP）の第 3 回目の写真展が 1859 年のサロンと同時開催された。

この写真展は、ボードレーが写真を批判した『1859 年のサロン』（*Salon de 1859*）で取り上げられていることで有名である。今日の写真史においても、1859 年の写真展はサロンと同じ建物、同じ日程で展示されたことが強調され、写真と芸術の関係を大きく変えた出来事の一つとして認識されている。

しかし、1859 年当時の写真専門誌『ラ・リュミエール』（*La Lumière*）や SFP の会報（*Bulletin de la Société française de photographie*）を確認すると、この写真展の開催が最初に一般に向けて発表された際、展示場所は当初からサロンと同じ建物と決められていたものの、開催期間は当初、サロンと同一の予定ではなかった。さらに開催後の批評で主要な作品として位置づけられていたのは、今日ではほとんど顧みられることのない絵画複製写真という分野であった。写真家たちは有名絵画を撮影した写真画像を作品として出品し、その芸術性を高く評価されていたのである。

本発表は写真専門誌『ラ・リュミエール』を中心に読み解き、1859 年の写真展の開催に至るまでの動きや、開催後この出来事が写真と芸術との関係にいかなる結果をもたらすことになったのかを解明するものである。ここではサロンと「同じ建物」「同じ日程」という着眼点のうち、特に後者に着目し、まずその日程がいかに発表されたのかを示す。そして、サロンとの同時開催という事実がいかに宣伝されたか。この写真展開催の前後、写真擁護者たちが写真を芸術として認めさせるためにどのような記事を発表していたのか。この写真展の成功で彼らは何を訴えようとしていたのかについて考察する。

サロンと同時開催された 1859 年の写真展は、写真は芸術でない、写真は伝統的な芸術の一分野である絵画と同列にはなりえないとする、当時高まりつつあった写真への批判的見解に対する反論の機会として機能していた。ただし、写真の芸術性を認知させるために、彼らは写真独自の芸術的特性を訴えるのではなく、写真が絵画を中心とした既存の芸術の秩序に取り込まれることを望んでいた。彼らは開催期間や展示作品について、写真展とサロンとの共通性を探し出し、それを強調することで、写真の芸術としての地位を高めようとしていたのである。

写真史や、ボードレー研究といった複数の研究分野から注目を集めてきた 1859 年の写真展であるが、本発表ではこうした写真専門誌の当時の記述を参照することで、この出来事がいかに報じられ、芸術と写真の関係においていかなる意味を持たされていくことになるのかを分析する。